
校庭

龍虎 散怖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

校庭

【Nコード】

N0008S

【作者名】

龍虎 散怖

【あらすじ】

本当は短編で投稿したかったんですけど、長くなっちゃったので連載で投稿します。屋上の続編です。

屋上 <http://ncode.syosetu.com/n2019p/>

校庭 1

最近、私の後について来ている奴がいる。俗に言うストーリーカーと言う奴だ。

だが、周りの人間にその事を言っても意味がないだろう。なにせ、そのストーリーカーはもうこの世にはいない。というか、生きていない。幽霊である。

しかもその幽霊が、毎日毎分每秒……、とは言わないが隙あらばプロポーズをしてくるのだ。

話は変わるが、今は朝である。登校なう

例の幽霊が私は何をしているのか聞いてきた。無論、ツブッターだ。

なんだろうか、隣から不快な笑い声が聞こえるが無視した。私は最近このツブッターにはまっている。初めた理由は、数少ないというより唯一の友達に誘われたからだ。元々、携帯電話など通話の手段としか思っていなかった私はこの、『不特定の人間に自分の個人情報进行揭示する』という不可解極まりないシステムに興味を持ったのだ。

今は、ネット社会の常識を勉強中。最近分かったことは、今やっていることのあとになうと付けることだ。

今、隣の幽霊が笑いながら、サイトの名前はツブッターではないと、私に言ってきた。私は無言でそいつを殴り飛ばした。理由？イラッときたからだ。

私は、他人が感じられないものが感じられたり、触れられたりする。例が、このクソストーリーカー幽霊と空からの声である。他にもいろいろあるのだが、面倒くさいので省く。空からの声は、私が孤児院にいた時から、……物心ついた時から聞こえている優しく非常な声だ。空を見上げると聞こえるその声は、いない私の母代りだ。空の声を聞くと、とても心が温かくなる。母なる地球のこえ、つまり

母の声なのだから当然だ。

もうそろそろ校門が見えてくるころだろうか？隣の幽霊が私が喰らわせたアップパーから復活し、学校を見た。その眼はなんだか悲しそうに見えた。そいつは私の視線に気づいたのだろうか。大丈夫だと言って、爽やかな笑顔を見せた。腹立たしい、何故か分からないが腹立たしい。分からないからもっと腹立たしい。私は眉間にしわを寄せていたのだろう、隣を歩いていた生徒がいぶかしげにこちらを見ている。冷静にならなければいけない。

私は、この春家の近くの高校に通うことになった。この高校を選んだ理由は近かったからである。本当はもっと偏差値のいい高校にも行けたのだが、遠くて行く気になれなかった。それならば、こっちの近くてまあまあな偏差値の高校のほうがよかったのだ。

校門をくぐると卒業式に花が散ってしまった桜が出迎えてくれた。近くでそれを嘆く声が聞こえたが、私は桜は花が散ってしまった方が好きだ。青葉が生きていて、その生気で私に力をくれる。生きている。花が散っていると、死のおいを思い出す。美しい死であることには変わりないが、それでも地に落ち、踏みつけられている散った花びらを見ると心が痛むのだ。

私は、校舎に向かって歩き出した。

入学式前、一目で 新人です。 といった担任がやってきた。何をそんなに急いでいるのだろう、ネクタイは曲がっているし前頭部は髪の毛がタイフーンだ。あれで入学式に出ようというのか。それはそれで勇気のいることだ。

簡単な自己紹介をすませたタイフーンは台風のように去って行った。何のためにここまできたのだろうか？集団お見合い会のようになっている教室は、当然のごとく五月蠅かった。すると幽霊が、モサッと私に後ろから抱きついてきた。私は、不快と疑問で眉をひそ

めたが、背中からそいつをはぎ取ることはできなかった。往来で、いきなり何かに憑かれたように暴れたしたら、周りの生徒は私を不審に思うだろう。周りの人間が私のことをどう思おうと知ったことではない、だが、周りに不審に思われることは虐めというくだらないものを連れてきてしまう。そうなると面倒なのだ。

どうしようか迷って立ち止まっていると、ふと、あることに気付いた。なんと、周りの騒音が一切聞こえなくなっていたのである。もう死んでしまっている者達には、そういう訳のわからないことができることが多いがこれもその一種なのだろう。

こいつが頭に乗っているのはあいかわらず不快だったが、それでも私のためにしてくれたことなので、良しとすることにした。

することもないので、ボーっとしていると、教卓の上に何か乗っている。近づいてみると、それは入学式のあいさつのメモ用紙であった。ご丁寧に、『校長に渡す』と一番下に走り書きしてある。ばっちり、今日の日付が書いてある。私はインクで青線の引いてある紙を持ち上げて、少々迷った。届けてやるべきか、やらないべきか……

肩に乗ってる奴が、持って行ってやらないのかと、ボソツと言った。

本来であれば何もないであろう右肩の上をパンチして、私は体育ホールへと歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0008s/>

校庭

2011年10月6日22時55分発行